

# ART ESSAY

アート★エッセイ

## 環境から「感境」へ —働きかける風景の現場

たほりつこ  
(パブリックアーティスト)



私はこれまで環境や風景と関わるアートを続けてきました。それは近代社会の自然との関係を問いかけ、その文化と意味について考えることでした。環境や風景と密接に関わる場を求めて、室内から屋外へ、そして街の中へと作品の場所やスケールは変化し、それらはランドスケープ彫刻と呼ばれています。また、現代都市が持つ多くの問題と向かい合うことで、パブリック(人々のための芸術とは)やコミュニティ(主な鑑賞者は誰か)は作品の大きな要因となりました。けれども、いつも感じるのは、自分の感性は子どもの頃の経験に大きく依存しているということです。

私にとって小・中学校は楽しいところでした。毎朝、吉野川にかかる1キロ以上の橋を渡り、水面の朝の光の輝きに見送られ、帰りには夕焼けの大きな空に迎えられて通学し、学校では先生方の笑顔と生き生きとした姿がありました。授業以外に課外活動もあり、理科クラブでは植物採集や実験、気象クラブで毎日の観測。植物採集では草花をたくさん持ち帰り、新聞紙にはさんで乾燥させるために、夏休み中は毎晩のように大仕事。山の清浄な空気とは違い、

3畳ほどの埃も動かないような納戸で、裸電球の熱とじっとり汗を感じながら続く時間の堆積はものと関わることの重さを教えてくれました。よく覚えているのは、家のまわりの風景を絵にして、日の出・日の入りを毎月調べたことで、自分が住んでいる世界を初めて絵に描き、太陽の動きと地平線に囲まれた世界に自分を感じる幸せな時間を持てたのは貴重なことでした。また、小学校では毎日、構内の掃除当番で、きれいに掃目をつけたり、広い砂利道の小石を並べたりして、自分が働きかけることで、周囲の大きな空間がまったく異なって感じられることを知りました。草を抜き、雑草の名前を教わり、根の強さや葉っぱの香りや汁を体感して、植物は馴染み深いものとなり、一緒に教わる詩歌や絵、生活の中に見られる文様などに繋がっていきました。結局、科学や技術の専門家にはならず、自然物がそのまま生きている空間創造に関わる芸術表現を志向しました。芸術は個人の生涯を通じた情熱が核となって初めて形になる厳しさを持っていますが、その結果は陽だまりのように人々を温かく包みこむものでありたいと願っています。(たほりつこ)



「グリーン・ヴィラ」の制作風景  
(2003)

特集

## 先生が変わる! 授業が変わる!

第4回

「先生力」を高める

### 「先生」のイメージ

「校庭に立っただけで20代の先生には子どもたちが集まる。30代の先生は、呼べば子どもたちは集まる。40代の先生が呼べば子どもは逃げる。50代の先生は子どもにとっては昔の人。若いということはそれだけ掛替えのない魅力があるのだから、子どもたちの信頼に答えられるように頑張りなさい」と、新米を励ましてくれた古参の先輩を思い出す。

「先生」という言葉には、「教師」や「教員」という生業を示す言葉よりは個性的・全人的存在のイメージがある。そして、「先生」の多くは良心的である。ただ、ときに独善的で押し付けがましく、ラディカルで頑固である。

それが資質と言え言えなくもない。信頼を強く得るには必然である。先生が変わると授業が変わるといふものの、先生自身の変革はそう簡単なことではない。

ものごとの評価には信頼性と妥当性が必要であると同じように、先生もその人間性に対する信頼性に妥当性が加わって、新人には確かさが、ベテランには豊かさが出てくる。

この妥当性をどこに求めようか。

妥当性の在りようは、一律ではない。単に職務遂行といったための表面的な中身だけでは、その本質は見えてこない。

あるフランス文学者が「想像力とは、イメージをつくる能力であり、それは基本的イメージから解放し、またイメージを変える能力である」と語った。「先生」のイメージが変わるか否かは、「先生」本人の「想像力」の在りようにもかかっているのは言うまでもない。

# 「指導」という名の愛情表現

神奈川県横浜市立氷取沢小学校 榎永 卓三

## 1. はじめに

近年「支援」という言葉がもてはやされ、指導と支援のはざま教育現場においては日々混乱の様相を呈していたように感じてならない。子どもたち一人ひとりの思いを大切にすることで、ともすれば指導という部分が弱くなってきたように思われる。「支援があって、指導なし」と言われる所以は、さしずめこうしたところであろうか。画一的な一斉指導が改善・工夫されていく中で、多種多様な指導方法・形態が駆使されてきている。しかしながら、子どもたち一人ひとりの表現力そのものは、本当に豊かなものにつながっているのだろうか、と考えてしまうのもまた事実である。

表現活動そのものは、我々人類にとっては欠くことのできない本能の一部である。それぞれの個性に合致した表現方法があり、これはとりもなおさず生涯学習にも通じる部分でもある。身体表現等を含め、そこにはいろいろな方法・形態があり、ときとして目的・情感に合わせた形で選択していくこととなる。また、その行為には必然的にその時々的心情が映し出されることにもなる。概念的表現から、成長とともに視覚的・客観的表現へと広がっていくこの表現活動という世界は、実に摩訶不思議な魅力と楽しさに包まれたジャンルである。それだけに、我々教育現場に携わる者としては、それなりに多面的なとらえ方を常に心掛け、子どもたち一人ひとりの思いをしっかりと受け止めたいものである。

子どもたち一人ひとりの表現活動への思いを大切にするとともに、表現活動を支える基礎・基本となる部分については、自信を持って指導を展開していく必要がある。それぞれの表現活動を支えていく基盤は、基本的な知識・技能であり、創造へと常に自己を駆り立てていく意欲である。その

背景には、当然教師の指導が存在することとなる。

今こそ自信を持って「指導」という名の愛情を、たっぷり子どもたち一人ひとりに注いでいきたい。そのためにも我々教師は、授業展開のコンセプトをしっかりと把握し、個々への指導などを含めたレシピを作成していかなくてはならないと考えている。

## 2. 表現活動を豊かにするためのキーワード

### ①子どもは環境で育つもの!

学校全体で環境づくりを考えてみよう。私は感性を常にくすぐり続ける環境が、豊かな創造力につながるものと考えている。

学校全体を「子ども美術館」というコンセプトに立って環境づくりを進めてみてほしい。子どもたちにとっては、特別な芸術作品ではなく、身近な子どもたちの作品や先生方の力作(?)が一番の刺激だ。季節の移り変わりとともに、また学校行事などの関連から、定期的に模様替えをしてみてもどうだろう。きっといつもと違う子どもたちの瞳の輝きに気づくことと思う。感性は、常に刺激を栄養素としている。それは子どもたちのセンスを養い、自らの新たな感性を大きく成長させていく。後は、子どもたち一人ひとりの表現パワーに任せるだけである。

### ②素材との一つひとつの出会いを大切に!

学校教育は、元来意図的・計画的に進められるものである。当然、図画工作科に見られる各素材との出会いも同様である。それぞれの出会い・体験が基になり、自己の表現活動を支えていくことになる。そこには、しっかりとした課題意識が存在し、自己解決しようとする活動が見受けられるはずである。そのためには、素材との格闘経験が必要となる。格闘する中で、新たな工夫や発見が生まれ、またこうした快い生みの苦しみが、表現

の喜びにつながり、また豊かさにつながっていくものである。当然、各素材との基本的なかかわり方について繰り返し指導を展開していくことが大切となってくる。自信を持って指導を展開するとともに、大いに子どもたち一人ひとりに素材との格闘を意図的・計画的に楽しませて欲しい。

### ③知識を知恵へと変換!

素材との出会いを大切にするとともに、そこで勝ち取った気づき・工夫を単なる知識としてではなく、自分自身の知恵として身につけていくことも重要である。私自身の子どもの頃を思い返してみるにつけても、自然と毎日向き合い、また遊びながらいろいろな遊び道具をつくったものである。学校で学んだ知識を基に、遊びの中で試行錯誤することから生きた知恵として活用することができたと考えている。失敗から学ぶこと、一つの知識をフル活用すること、何か利用できないか常に考え続けること…この試行錯誤という行きつ・戻りつが大きな造形パワーとなるのである。子どもたちを大いに悩ませ、そして楽しませて欲しい。

### ④子どもはラインで育つもの!

小・中連携の必要性が声高に叫ばれている昨今、今一度そのことについて考えてみよう。それぞれのステップにおける基本的なプランは存在しているわけであるが、今一つ「連携」といった部分では不十分であろう。子どもたち一人ひとりは、幼稚園・保育園、小学校、中学校と連続性を持って成長していくことになる。すなわち、ラインそのもので成長しているのである。それを意識した教育プログラムが存在してこそ、このラインが生きてくることになる。そういった意味でも、今まで以上に異校種間連携を図っていくことが不可欠となってくる。造形教育の情報交換・学習会・交流会等々、各校種間の交流を積極的に進めていくことが必要となる。

### ⑤感性は一日にしてならず!

感性を育むということは、とにかく時間と日々の努力が必要である。子どもたちを取り囲む環境づくりも大切であり、何より継続した感性への刺激を発信し続けることが必要となる。題材研究を推進するとともに、自信を持って子どもたち一人ひとりに指導を展開していった欲しい。

造形教育のよさとは、子どもたち一人ひとりが

いろいろな個性と出会いながら自己の感性をより豊かに成長させていくことにある。今こそ、教師一人ひとりが自信を持ち、「指導」という名の愛情表現をしっかりと伝えていくときである。

(かしなが たくぞう)

## 造形プラザ

### 研究会のご案内

#### ○第73回 小学校教育研究協議会

#### 研究主題： 学びの力を育む授業の創造

主催：埼玉大学教育学部附属小学校  
会期：平成17年10月18日(火) 国語・社会・図画工作・体育・健康教育・総合  
平成17年10月19日(水) 算数・理科・生活・音楽・家庭  
会場：埼玉大学教育学部附属小学校  
内容：公開授業(図画工作は5本)・分科会 他  
会費：3,000円  
問い合わせ/埼玉大学教育学部附属小学校  
Tel: 048-883-6291(代表)または  
048-833-6572(図画工作研究室直通：  
山根 淳一) Fax: 048-833-0968

#### ○第44回 東京都図画工作研究大会 城東大会

#### 「子どもとつくる図工」

#### — 図工に流れる豊かな時間 —

日時：平成17年12月2日(金)  
会場：墨田区立曳舟小学校(京成線曳舟駅下車徒歩3分・東武伊勢崎線曳舟駅下車徒歩8分)  
主催：東京都図画工作研究会  
城東ブロック図画工作研究部(墨田区・江東区・江戸川区・葛飾区・荒川区)  
内容：公開授業、分科会発表、全体会  
記念講演 講師：美術家 横尾忠則氏  
参加費：3,000円(紀要・授業案・報告書等  
資料代を含む)  
連絡先：〒131-0043 東京都墨田区立花1-18-6  
墨田区立第一吾妻小内  
城東大会事務局 丸山 輝(事務局長)  
Tel: 03-3617-0198 Fax: 03-3617-0128

## 「先生力」を高める

茨城県神栖市立神栖第二中学校 新橋 成夫

### 1. はじめに

21世紀を迎え、科学の著しい発展に伴い、高度情報化社会ができあがった。とりわけIT関係の発達は予想以上の速さで進んでいる。その日の内に、日本全国津々浦々に多くの情報が同時に発信され、誰もがどこにいても同じ情報を共有することができるようになった。中でも教育界の不祥事に関する情報発信に対する注目度は高く、様々な形で多くのメディアで採り上げられている。昔から、「悪事千里を走る」と言われているが、これほど広範囲で且つ多くの人に伝わるとは想像できなかつた。その結果、先生バッシングが全国的に起き、先生方への信頼感喪失や尊敬される立場から引きずり降ろされ、指導効果にも悪影響が出始め、学校内外を問わず問題となってきている。

現在、全国的に休職者数が増えている事も関係のないことではない。僅か一握りの不心得者のために、失ったものは比較にならぬほど大きなものとなった。そこで、この特集を通して私のつたない実践や経験から、今一度元気な先生方となるように応援のメッセージを送りたい。

### 2. 自分に自信を持つ

先生方にとって何より厳しいのは、新採であろうがベテランであろうが給料をいただく立場になれば子ども・保護者や地域社会から同等の扱いを受け、また同等の期待をかけられるということである。特に最近では、個々の先生方の甘えや言い訳を認めない風潮が強い。逆に相手方の要求や権利の主張が幅を利かせる時代になってきている。

そこで、何よりも自分自身に自信を持つことが大切になる。知っているか知らないかなどを気にするよりも、毅然とした態度で自分の態度や考えをしっかりと述べる必要がある。分からない

ことが恥ではなく、分かってほしい、努力を積み重ねられないことこそが恥ずかしいことである。

つまり、自分の知識や技術や能力よりその土台である肉体と精神が健全であり輝きを持っていることが必要なのである。中でも人間性であり、やる気であり、また仕事への使命感・責任感である。その事に常に磨きをかけていけば多少の事は乗り切れる。その上で、前述した知識や技術、能力が求められてくる。何よりも柔軟に対応できる柔軟い心を早く身につけて欲しいと願っている。

### 3. 実践から① 先生としての専門性を磨く

非常に大雑把で申し訳ないが、先生として磨くものに、大きく分けて教科に関わる内容と教科外活動に関わる内容が考えられる。前者は教科経営に関するもの、例えば図画工作・美術の専門的な知識・技術・指導力である。一方、後者は学級担任として学級経営に関するもの、例えば道徳指導、特別活動、総合学習等に関する指導力となる。

私自身の実践としては、教科に関する内容については学生時代からの積み重ねがどれだけあるかが教師生活の開始時に大きく左右した。その積み重ねがあればあるほど、もう一方の専門性を磨く時間の確保に繋がるからである。初めて教壇に立ったとき、学級担任を任せられ、どう経営していくのか皆目見当がつかなかったことを記憶している。

古来より、日本の職人は師匠から技を盗む、という伝統がある。当時は先生の世界も同じ事が言えた。直接聞いても簡単には答えが返って来ず、先輩教師の背中から「教えて欲しいければ、自分で苦労してからだ」という声が聞こえてきたような気がした。とにかく泣き言を言っても始まらない。毎日顔を合わせる子どもたちは、何かを期待し、何かを学ぼうとして学校に来て私の授業に参加しているわけだから。そう思うと余計に焦り、空回

りすることもあった。しかし、逆に「先生頑張れ」という子どもたちの心の叫びも聞こえてきた。

今でも私は、「立ち止まっていたは何事も始まらない。歩いても、這ってでも前に進めばいつかはゴールが見えてくる」というスタンスを変えていない。授業参観、放課後の研修、夜の飲み会、休みの日の交流、研究会等、あらゆる場を無駄にせず、ときには話術を盗み、資料を頂き、教育観を闘わせた。全ては子どもたちのために、という気持ちだった。

### 4. 実践から② 教科の専門性を磨く

前述したが、学生時代の積み重ねがその後の財産だった。それとて先輩の先生方に比較したなら大した積み重ねではなかったが、そのころの自分のポリシーは、教科の専門性については誰にも負けない、負けたくないという意地のようなものだった。若気の至りだが、今振り返ると随分生意気で、恥じ入るばかりである。

学校にほぼ1人の教科でもあり、教材研究の難しさ、研修推進の難しさがあった。幸い、地域のサークルや先生方の研修機会に恵まれ、授業交流や指導法研修会、地域素材研究会、技能向上研修会、先進地域視察研修等、多種多様の会合に参加することにより自己の専門性に磨きをかけることができた。また、研修会後の夜の部では、互いの教育論をぶつけ合い、ときには日頃の悩みを聞いてもらうなど、本音と愚痴を言い合った。それが精神安定剤の役目を果たし、明日への活力となっていった。

学校の中だけではできない研修の積み重ねと学校での1人で取り組む研修の工夫により、授業への準備が以前にも増して用意周到になり、授業に向かう楽しみをより感じる事ができた。当然、授業中に悩んでいる子どもへのアドバイスに幅が生まれ、一人ひとりの実態に応じた資料や技法、アイデアの提供が充実していった。

### 5. 真の学力向上

図画工作・美術は、世間的にはおまけの教科のように思われ、保護者の皆様や子どもたちには「受験に関係ないから」というただ一点のみで低く評価されたことがあり、正直悔しかった思い出があ

る。私たちの生活を豊かにするのにどれだけ深く関わっているのかを冷静に考えれば誰もが分かる答えなのだが…。現在でも似たような状況があり、最近では学力向上のためには、美術・音楽等の時間を削減すべきだという声も再燃している。

私の経験から、作品のでき具合で質的な向上が見られた子ども、取り組む姿勢に集中力がでてきた子ども、完成度にこだわりが生まれてきた子どもたちの受験科目の点数は伸びていることが多かった。特に作品づくりの過程における、根気や集中力の伸びは学習意欲の形成に役立つとともに学習効果を引き出す大切な要因である。また、教科の特性である感動心の芽生えにより、人間性豊かな心の優しい子どもの育成に大いに貢献している。美しいものを素直に美しいと表現できる、また生み出す、創り出す喜びを体と心で感じる事のできる子どもが育っていけば、現在の教育界に向けられている厳しい批判は少なくなると考えている。間違いなく、少年犯罪も減少すると断言できる。

真の学力とは、決して点数などで判断することではなく、生きる力であり、世のため人のために活かすことのできる知恵である、と考えたい。

### 6. 終わりに

「先生力を高める」という特集への執筆を依頼されたとき、一番先に頭に浮かんだ言葉が何故「教師力を高める」とならなかったのかということであり、しばらくの間私の頭から離れない問いでもあった。確かに教師と先生は同義語であるが、受け手や使い方によっては若干の違いがあるかもしれない。教育現場では、教諭、教師、先生、教員、教職員等その時々で使い分けているところがある。一つひとつを改めて見直すと「先生」はどの表現より柔らかい表現であり、「○○先生」等と親しみを込めて呼ぶところも多い。私なりに解釈すると、「先生力」の言葉に込められた「人間性を重視する心」が見えてきた。その視点に立って見ると、図画工作・美術科の教科としては正にピッタリあてはまる表現であったと感じさせられた。この企画に参加させて頂いたことに感謝申し上げたい。

最後に、この「先生」という仕事に就いたことに誇りと責任を持ち、再び最も尊敬される職業の1つとなっていけるようお互いに頑張っていきましょう。  
(にいはいし しげお)

## 後輩に残すことば

新潟県上越市立八千浦中学校 堀川 紀夫

### 1. はじめに

美術は心・内界・頭脳に生じた想い・イメージを外界に表すことであり、また空間に生成することである。平面であれ、立体であれ、色・形・材料を紡ぐ美術表現それぞれに生成の理がある。美術には美術ならではの論理がある。一点のシミもイメージの言葉である。このような考え方、見方が身についてくると美術はどんどん面白くなっていく。

私は教師生活38年目である。美術教師として直接生徒を指導した期間は26年間で、この間は魅力ある題材開発が中心だった。管理職に就いてからは自作備品づくりが主なテーマとなった。しかしそれもあと半年である。攻めの姿勢で美術教師としての実践の可能性を探り、有終の美を飾りたい。

この間、生徒に教え、また教えられつつ体を成してきた美術教育についての考えを整理して本小論の主題に迫りたい。

### 2. 美術教師は題材開発が命

コマーシャルで「芸能人は歯が命」というものがあつた。芸能人の必要条件の一つではあろうが十分条件ではない。重要なのは十分条件である。美術教師は題材開発能力が命である。

美術科の指導要領の内容を本質的に考えれば考えるほど、教科書題材の代替可能性が広がっていく。その意味で美術科の指導内容と題材の関係は開放されている。富士山だけが山ではない。至る所に青山はある。いろいろな研究的協議の機会に納得してしまうのは、よい指導をしている美術教師ほど教科書から離れるというパラドックスを内包していることである。

私の場合、最初に現代美術があつた。現代美術の多様さ、自由さに魅せられて大学を卒業し、美

術教師生活が始まった。「私のある題材開発」が初発からの研究主題となった。それは私の作品であり、私の表現活動の全てである。また汎材料主義、新素材主義も私にとって重要である。これは自分で見つけた材料を題材化することである。また市販の教材をそのまま取り入れることは墮落である。

### 3. 情操という思考力が命

美術で絵を描いたり、彫塑で石膏取りをしたりという技術は習ったことがある。それはそれで楽しいものであり、教える内容ともなった。しかし、教科の最終的な目標は情操を豊かにすることである。情操は感性を統御する高次な感情である。美・創造・造形性を追求することで情操が形成されるのである。

さて、創造的な作品表現を目指すには、味には味の素があるように、美術の素、美術の要素、とりわけ造形思考の開放的な広がりを獲得する頭脳活動が必要である。美術を生成させるものは脳力であつて他ではない。重要なのは眼・手・頭を駆使し、色・形・材料を紡ぐ造形的な思考の力である。換言すれば外界と美術的感性との共振・共鳴という相互作用である。

経験を積むに伴って身のまわりの事物、事象が豊かな意味を持って眼前に立ち現れてくるようになる。森羅万象の呼吸が花一輪の中に見いだせるような心の境地である。アートでいうならメタ・アートの地平の獲得である。このレベルで表現活動を動機づけ、教え、支援する双方向の授業づくりは美術教師冥利の楽しさ一杯である。このような美術の本質に迫る見方、考え方については実践レポートで自らの教育実践を客観化することと、作家としての表現活動を展開する両輪で獲得したように思う。

### 4. 身体に刻む感動体験が命

中学校3年間の指導計画にオリジナルな作品をちりばめること、できたら全てを「私のある題材」で構成したいと願ってきた。かなりの題材を開発してきたが、机サイズ(平面なら4ツ切り画用紙)を超えることがなかなかできない。音楽では全校であるいはそれ以上の人数で大合唱が可能であるのに、美術は規格化された机サイズで終始してしまう。この現実には活路はないのかと悩んだ。

そこで共同で行う創造活動の題材開発に力を傾注した。例えば10mもの長尺画用紙を使った卒業共同作品。また薄い紙を貼り合わせる熱気球づくり。いずれも体育館やグラウンドを使ったりする身体に刻む美術授業である。それらは空間的な拡大で勝負するものと、空間を限定した無限分割に場所を得る方法の2つとなった。後者の成功例は「卒業パズルメッセージ」という学年共同作品で、平成元年度に上越市立城北中学校で始まった。そして、今年度に至るまで継続実践されてきている。そのことにここで感謝と敬意を表しておきたい。

### 5. 終わりに

教頭職となった際に、美術科指導から離れて題材開発もはやこれまでと観念した。が、その分学校独自の教具・備品づくりや行事への参入、環

境整備などに美術に関わる実践の可能性が大きく広がっていたわけである。

その中で、一番の成功例と自負するのが自作備品の聖火台である。設計が勝負の発注作品である。体育祭で年に1回使うだけの贅沢備品で、オリンピック同様に演出効果は抜群である。その他にもさまざまな形で学校行事などへの参加を試みた。

美術教師は時数減に伴い、授業時間が以前に比べて半減し、困難な時代に直面しているが、美術教師は美術が命である。教科指導を超えて美術のよさを学校運営の中に生かしていく大きな美術力を培うことが肝要である。

(ほりかわ みちお)



「宮島達男氏の柿の木プロジェクト」での卒業記念樹  
(平成12年度 三条市立月岡小学校)



聖火台(平成14年度 現任教)



校名イニシャル「Yモニュメント」  
(平成15年度 現任教)



# 美術教育の可能性を求めて

## ～表現アートセラピー実技研修会への取り組み～

埼玉県春日部市立飯沼中学校 釜谷 光枝

### 1. はじめに

近年、生徒を取り巻く社会情勢や価値観の多様化の中で、子どもたちの集団生活への不適や無気力、さらには不登校といった問題が増加してきた。

子どもたちの心の中に「生きる力」そのものが十分に育てられていないと感じるにつけ、今ほど、教育に「生きる力を育むことの重要性」を求められているときはないと思う。美術科の教師として、子どもたちの持つ創造性を育み、発想や制作を通して、自己表現や課題解決を学ばせたい思いから、美術教育の可能性と子どもの「生きる力」を育む手法を表現アートに探ってみた。

### 2. 表現アートセラピー

表現アートセラピーの「すべての人が持つ創造性は、人が人として十全に生きるための力であり、創造の過程で得られる癒しや自己への気づき、また自己理解が自己肯定感につながっていく」との考えのもと、子どもたちの中にある創造性を耕す役割を背負う教師自身が、今回のワークショップの中で、表現することの意味や、創造の喜びを体験できるよう企画した。ナタリー=ロジャース(表

現アートセラピーの第一人者)のもとで学び、表現美術の指導者として活躍する相澤るつ子女史を講師に迎え、表現アートの手法から、パス—アラウンド—ピクチャーとタッチ—ドロ잉の二つを取り上げた。小・中学校の図画工作科・美術科主任の実技研修会としては、おそらく初めての試みである。

### 3. パス—アラウンド—ピクチャー

- ・B3程度の画用紙と短時間で描くため、クレヨンなどの描画材を用意する。
- ・7～8人のグループで座る。
- ・画用紙にクレヨンやクレパスをワンストローク(ひと筆)描いて、隣へ次々にパスする。
- ・最後に、自分が最初に描いた絵が手元に戻ってきたら、自分の絵に納得のいくまで好きに手を入れる。
- ・終わったら、作品に題をつける。
- ・絵の中に、自分の感じた言葉や思いを、好きな色、好きな素材で描き込む。
- ・すべて終わったら、隣やグループの人と感じたことを互いに、I(私、という意味)メッセージで語り合う。

ここまでの過程で参加者は、無意識のうちに選んだ色やモチーフの意味について理解し、自分の描いた線や色が、作品にとって破壊となったり修復となったりしていたことや、気づかなかった自分の気持ちに改めて出会う。

最後に、指導者の「自分の気持ちを分かってくれた感じがしましたか」との問いに、分かってもらうことの喜びの体験をすることで、理屈ではなく、「分かってくれたことの大切さ」を実感し、「分かってくれたこと」で、子どもの表現意欲が出ることを理解する。



体感したことをシェアリングする参加者

### 4. タッチ—ドロ잉

- ・両手で描くことができるくらいの大きさの塩化ビニールなどのシートと、水性・油性の絵の具(今回はホルベイン社の「デュオ」を使用)、ローラー、白の薄用紙を十分な枚数用意する。
- ・リラックスして、自分の気持ちに無理のない色の絵の具をチューブから出して、塩化ビニールのシートの上のせ、ローラーで伸ばす。
- ・薄用紙を軽く被せ、フィンガーペインティングのように、両手のひらや指を直接紙の上のせて、心の想いのままに、触覚の持つ原初のイメージで、上手下手にとらわれずに描く。自分の直感を信じて、頭ではなく、ときには目を閉じて、想いに従って描く。



デモンストレーションをする相澤女史



タッチ—ドロ잉の技法①(参加者)

タッチ—ドロ잉は、心の深層を心地よく解き放つ役割が大きいので、絵の具の色を自分の心に無理のないように選びながら(もちろん混色もどんどんしていく)、何枚も何枚も自分の直感を信じて制作していく中で、自分の内側からの声を聴くことができる。自分を批判しないで、「自分でいい」、「自分でよかった」との自己肯定感をしっかりと育てることで、参加者は、心の安定と表現への意欲の高まりを実感する。自由に好きなようにさせるのではなく、子どもが持つ感性や創造性を引き出し、育てるための手だてを体験する。



タッチ—ドロ잉の技法②(参加者)

### 5. おわりに

義務教育の場で、子どもたちの幸せのために何が求められているのか、美術教育でなければできないことなど、自分なりに模索してきた。これからも、子どもたちの創造の目を大切に、それぞれが自分の力で考え、課題解決に向けて行動できる「生きる力」の育成を目指して、美術教育の可能性を探っていきたい。(かまや みつえ)



講演する相澤るつ子女史



パス—アラウンド—ピクチャーの制作を終えて

# 子どもの椅子

FROM

岩手県岩手郡雫石町立雫石中学校  
佐々木 俊江



いつもは忙しさにまかせてキャッシュコーナーの機械で用を済ませるのだが、夏休みに久しぶりに銀行の窓口を訪ねた。受付の方の明るい声とともに最初に目に入ったのは彫刻家、舟越保武さんの女性像だった。彫刻の温かいまなざしに触れて、暑い中自転車で来たかいたがうれしくなった。

舟越さんの作品は屋外に設置されている像だけでも全国各地に100体はある。郷土出身ということもあり県内では県民会館、役場、病院、学校、公園、銀行、店舗、駅前の一角など身近な場所がたくさん出会うことができる。舟越さんは3年前に他界したが、作品のどれもが今も命を持っているかのように美しく息

づいている。

私は彼の作品や彼の生き方にすっかり魅せられ、作品を訪ねあちこち旅行もしたし、鑑賞の授業や美術館訪問学習などで作品をたくさんとり上げてきた。学べば学ぶほど作品のすばらしさや舟越さんの生き方に感銘している。

そんな中で、通常美術作品を鑑賞する際には、対象となる作品を鑑賞する側がどう感じるか、という一方通行が多いと思うが、舟越さんの具象彫刻にはそれだけとは思えないものがある、ということを感じた。鑑賞する側が感じることに同じように、彫刻自身も町やそこにいる人々を深く見つめているように思える。

県内のある町の運動公園に、舟越さんの「渉」という少年像がある。その像は町制施行25周年を記念して健全な青少年の育成を目指す町民の強い願いによって設置されたもので、除幕式には生前の舟越保武さん本人も参加している。それ以来何年もの間「渉」は町並の様子や町民を純粋な瞳で見つめてきた。以前私がこの町で教壇に立っていたとき、この「渉」という作品が私たちに何を語りかけているか、というテーマで鑑賞の授業を行なったことがある。そのときの生徒たちからは、期待以上の答えが返ってきて驚かされたことを覚えている。「渉」は生徒たちの身近にあり、移り行く町

の様子を優しく見つめていたのだと改めて感じたものだった。またこんなこともあった。以前元気だった生徒が突然大病を患ってしまったときだった。いたたまれない気持ちでお見舞いに行ったとき、その子のお母さんが、この子は何も分からなくなってしまうけれど舟越さんの彫像だけは気にかけるのだと話してくれた。待合室の女性像は以前に授業で話題にしたことがある作品だった。その生徒が再び元気になってからも、お母さんはその像に希望をもらったことを思い出すと。舟越保武さんの作品に出会うと、このようにときどき語りかけられ、教えられ、元気づけら



「渉」

れることがある。慌ただしく過ぎていく日々の中で、彫刻作品に気をとめて作品を味わうことや、作品から自分自身を振り返る心のゆとりが生まれることをうれしく思うのである。そして私だけでなく、そう感じる生徒が1人でも増えてくれることを願いながら日々の授業に取り組んでいる。(ささき としえ)

## 図工室

## 美術室

私たちの地域(愛知県幡豆郡)

では、毎年9月の終わりごろ、全小・中学校が校区内の目を引くような場所へ出かけて、写生大会を行っている。当日は、弁当を持って現地へ行き、下校までじっくりと時間をかけて、1枚の作品を仕上げるのである。

今年も実施日が近づいてきた。この時期は運動会が直前にあり、忙しいときでもある。事前指導の時間も思うように取れない。しかし、行う以上は子どもの力が高まり、やりがいや満足感の得られるものにしたい。

今年は、子どもたちの色への関心を高めるような資料を用意することにした。B判の紙の上に「茶色のなかま」18色と、「緑のなかま」18色を並べて貼った

### 自然の色の魅力

楠 知行(愛知県幡豆郡一色町立一色中部小学校)

ものである。色には全て名前を記載している。

「あずき色、らくだ色、小麦色、くちばし色…(茶色のなかま)」「青竹色、若竹色、若草色、うぐいす色…(緑のなかま)」

よく似た色の仲間でも、並べてみると、一つひとつに違いがあり、独特の味わいがある。

日本人は、昔からこれら自然の色に親しみを感じ、毎日の生活の中で楽しく付き合ってきたのである。子どもたちには、先ずこの魅力に気付かせたい。そして、「地面は茶色だから…」と

絵の具の茶色をそのままベタッと塗ったりはせず、自分の納得できる色をつくり出して彩色する姿勢を持って欲しい。

うれしいのは、校内の先生方が改めて関心を持ち、資料を使ってさっそく事前指導に取り組み始めたことである。教師の積極的な姿勢はすぐに子どもたちに伝わる。写生大会まであとわずか。子どもたちがどんな感覚で自分の作品を彩ってくれるか楽しみである。

(くすのき ともゆき)

### 美しさと楽しさを子どもに伝える

外山 範雄(大分県佐伯市立鶴谷中学校)

定例の年1回の「アルプス詣」が終わった。今年は、後立山連峰の鹿島槍ヶ岳に登った。去年は、北アルプスの表銀座といわれる燕岳や常念岳を縦走した。なぜそこまでして山登りをするのかというと、「山が純粋に美しい」からである。雪渓の上を歩き、雲の流れを足元に見る。まさに、心洗われる景色である。自然の雄大さに浸る瞬間でもある。

私は、美術教師は子どもへの美の伝道者であるべきだと考えている。その為には、まず自分

が美しいものに対し敏感でなければならぬ。美への渴望や憧憬が人一倍強くありたいとも思っている。美は体感するものだし、本物に触れることが最良だと思う。

美術の授業を通して、子どもに何を教えるのか。表現力や鑑賞力、観察力や想像力、あるいは構想力などあげればきりが無い。しかし、根本になるのは、「美的感覚=美しいものを美しいと感じる心」であろう。子どもに感動を与えるには美術教師の感性に委ねるところは大きい。

美術の授業時数が減少する中、学習内容は拡大しつつある。マンガにはストーリーが要求されるし、アニメーションには音声がついてくる。写真や映像には、デジタルカメラやビデオ、コンピュータは欠かせない。

本校では現在、3年生がフィギュアの制作をしている。そこには従来の絵や彫刻、デザインや工芸といった垣根はない。関心のあるテーマに沿って、楽しく心地よい作品づくりができればと願っている。

人間は本能的に美しくありたいと思っている。身辺を飾り、快適な生活を望んでいる。美術はまさに造形活動を通し、美を享受することは勿論、生きることも楽しむ教科であって欲しい。(とやま のりお)

# 「何が見えるかな？」

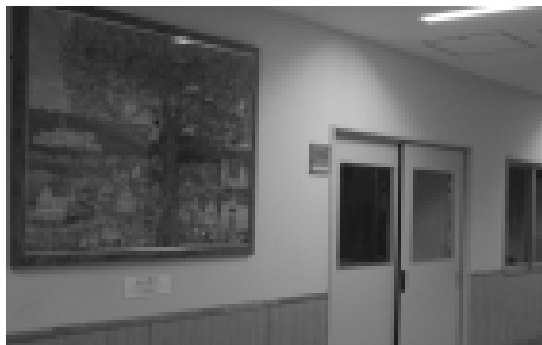
宮城県仙台市立市名坂小学校 野澤 桂子

## 1. はじめに

低学年でも「鑑賞」の学習をしましょうということになってしばらくになる。低学年の児童にはどんなことができるのだろう。高学年における「美術館に行って本物の作品を見る」、「名画を模写したり、デフォルメしたりする」、「作者の気持ちを推し量ってみる」といった活動のねらいは何だったのだろうか、いままでの鑑賞指導とどう違うのだろうか、またどんな教材がいいのだろうかと考えてきた。そんな折、転任した新設校に、60号(長辺の長さが約130cm)の絵画が地域の方から寄贈された。そこで、この絵の鑑賞を通して「見つける力」そして「想う力」を伸ばしていきたいと思うようになった。

## 2. 題材について

寄贈された作品は作者のお孫さんが景色の中に溶け込んでいる絵だった。さっそく、校長室の廊下に飾られた。子どもたちの反応は「あっ、大きな絵がある」、「この絵どうしたの」であった。私は「描いた人がね、みんなに見てほしいからってプレゼントしてくれたんだよ」と答えた。この会話の後、毎日のように子どもたちが作品の前を通って6か月、もうそこにあるのが当たり前になったころ、もう一度、絵の中に何が見えるかよく見



絵画作品が飾られている様子

てもらいたい、よく見ることによって今までと違う何かを感じてもらいたい、と思うようになった。

また、低学年にとって、自分たちが絵を描くことはとても身近な活動である。しかし、子どもたちは、大人が自分たちと同じように絵を描くところを見たことがない。「こんな大きな絵を描く大人の人が近くに住んでいる」ということに気づくだけで、芸術の日常化の一步にも、地域への関心の一步にもなるのではないかと考えた。

## 3. 場の設定

いつもは廊下にキャプションつきで、大人の目の高さに合わせて設置されている作品を子どもの目の高さに合わせ、照明も配慮した。また、一度に正面に1クラス分の人数が立てるようにも工夫した。

作者も実践の趣旨をよく理解してくださって、授業に参加してくれた。しかし、子どもたちへの紹介は、授業の最後に、子どもたちの活動への感想を述べる、という形で行うことにした。



授業中の風景

## 4. 授業の実際

作品を覆っていた布をはずしながら「何が見えるかな？」と投げかけた。すると子どもたちは、「あっ、見たことある」、「校長先生の部屋の前に

飾ってあった」と声を上げ、絵の中に見つけたものを一つひとつ挙げていく。

「青い鳥が2羽います」

「花がいっぱい」

「遠くに山が見えるよ」

「男の子が木に上って向こうの山見てるんだ」

「違うよ、山の向こうを見てるんだよ」

「サンダルが片一方脱げて、下に落ちてるね」

「季節は春だな」

「花がいっぱいだもん」

「ここは日本じゃないよね」

「おうちがホテルみたいなもの」

「この鳥とこの鳥、仲良しなんじゃないかな。こんな風に(ポーズをつけて)顔見合わせてる」

次々に手があがり、見つけたものまねっこを始めた。何かを見つけない、それを認めてもらいたいという顔でいっぱいだった。そして、子どもたちが自分なりに題名をつけてみることにした。作品は、半年間、キャプションつきで飾ってあったのだが、意外にも本当の題名を誰も知らない。

「とりのせかい」

「やまをみているおとこのこ」

「みらいの木」

「しろのくつ」

「花のしま」

「もりのくに」

「きれいなえ」

「たのしいえ」…

自分で考えた題名を絵のまわりに貼っていく。友達の考えた題名を興味深そうにのぞいたり、自分のものと比べたりした。最後に短時間で作者に今日の子どもたちの様子を見ての感想を述べてもらった。子どもたちは作品の本当の題名を知りたがり、それを知ると「ああ～、はずれちゃった」という声が聞こえた。作者が、「一人ひとり違っていいのですよ。私もすごく勉強になりま

孫たちへの贈りもの

(アルプスに囲まれた小国 リヒテンシュタイン) 作: 藤岡清美

贈 藤岡清美 様

本当の題名はこちら。



寄贈作品「孫たちへの贈り物(アルプスに囲まれた小国 リヒテンシュタイン)」作: 藤岡清美

した」と答えてくださったことが、児童の心の中に残ったようだった。児童と作者の方との話は尽きなくなりそうで、昼食をともに食べながらの談笑になった。「どうして絵を描いているの」、「こんど一緒に図工の時間に絵を描こうよ」という子どもたちの声が印象的だった。

## 5. 終わりに

美術館の学芸員の方に「先生方の中には美術館に来ないと本物の作品は見られない、と思い込んでいる方がいる。でも、自分の学校にある寄贈作品も本物でしょう。まず、じっくりそれを見てほしい」と教えていただいたことがある。その言葉通りにやってみて、このような実践なら、低学年でもできるということが分かった。さらに、美術作品でなくても、窓によって切り取られた風景や、教室の一隅を見つめることから見える景色からでも「見つけること」「気づくこと」「想うこと」は可能である。ただ、こうして作品名をつけさせてみると、子どもたちの発達による言葉の表現に限界があることに気づく。自分の感じたことを豊かに表現するためには、生活経験を積み、たくさんの言葉を身につけていくことも必要であろう。言葉の世界が豊かになればもっとよく見えてくるのではないだろうか。答えはひとつではないということに気づいたこの子どもたちに、今後さらに様々な場面でこのような活動を繰り返して取り組ませ、着実な力をつけさせたいと思う。こんどは何年生でやってみようかな。(のぞわ けいこ)

# 淀川の土と炎が生み出す形

大阪府摂津市立第五中学校 谷 嘉純

## 1. はじめに

現行の学習指導要領の実施がなされて、4年目になる。段階的に授業時数が削減される中、教育課程における美術科のあり方を常に考えてきた。

そんな頃に、平成12年度から3年間、シドニー日本人学校へ海外派遣の機会を与えてもらった。

シドニー日本人学校は、オーストラリアのニューサウスウェルズ州教育省から認可された私立学校である。現地児童も受け入れている学校で、日本人学級と国際学級とを併設している。このような環境のもと、現地教員とともに働くことで現地の教育事情を直に見ることができた。日本の図画工作・美術教育の視点で、現地のART教育に触れたことで、再び新鮮な気持ちで図画工作・美術を考えることになった。

## 2. 横断的に関連づける

現地においてARTは、すべての児童・生徒の必修教科ではない。だから、他の教科との関連づけでARTの存在がある。例えば、理科と図画工作の関連ある学習を紹介してみよう。

理科の自然観察や季節の移り変わりの学習をしたとしよう。そこで、ARTはプラタナスの紅葉を題材に、微妙な色の変化を観察して表現する課題があった。理科の中の、観察表現という位置づけである。今、必修教科としての存在を強くアピールしたい美術にとっては、他教科と関連づけることで吸収されてしまうことにならないかと、敏感になってはいないだろうか。

発想の転換を図って、美術の創作活動に他教科を巻き込んでいけばいいのである。

## 3. 「淀川の土と炎が生み出す形」

(美術科・社会科・総合的な学習を関連づけて)



オーストラリアでの生徒の活動風景

### ○実践のねらい

まず、3年間を見通した学年の教育目標の縦軸を国際理解と設定した。この学習から身につけてもらいたいものは、広い視点である。これらは、足元から少しずつ視線を上げていってこそ身につくものであると私は考えている。

身近な歴史や環境を知った上で、他の地域や他の国と比較しながら理想の姿を知り、自らの手で作り上げようとする意志を持った人間になってほしいと願っている。

### ○学習の展開

#### 総合的な学習から

- ・年間行事にある、春の校外学習を総合的な学習と関連づけ日本の文化に触れる機会として、滋賀県甲賀郡で陶芸の体験学習をした。
- ・本校では、総合的な学習の発表の場として文化祭がある。そこで、学年での取り組みテーマを日本の祭りとして、日本の伝統「四季の祭り」について調べ学習をして、ステージで披露した。
- ・自分たちの住む町の歴史を調べ学習をしていくうちに、町を流れる淀川との関係の大きさを発見し学習は深まっていった。この調べ学習もまとめて発表することになった。

#### 社会科の学習から

- ・社会科では身近な地域を調べるという単元との関連づけでルートマップづくりをし、調べたいことを決める。(1時間)
  - ・フィールドワーク(1時間)
  - ・まとめ・考察(1時間)
- ここでまとめ・考察したことは、

- ・堤防ができ水害の心配がなくなり安心して暮らせるようになった。
- ・「親子共同清掃」から地域の様子、河川敷のゴミの実態を知った。
- ・淀川の水質・河川敷の土壤汚染に驚いた。

ここで気づいた「環境問題」は、次回の総合的な学習の課題とした。

#### 美術科の学習から

以上の学習を総括することを目的に、私たちの住む地域、その中でもっとも関係の深い淀川の土を使って、何かをつくり上げたいという想いを持った。

陶芸をしようと決めたときに、陶土づくりからできないものと挑戦した。

- ・自分自身のつくり出した粘土との対話から、粘り強い持続力と集中力を身につけさせる。
- ・手づくりの喜びを感じさせ、成就したときの満足感を体験させる。
- ・板づくりとどべによる接合法を体得させる。

これらのねらいを持って、淀川河川敷の粘土の採取から始めたのである。淀川の汚染を目の当たりにして制作物をキャンドルカバーとし、テーマを環境への「警告の灯」にした。

粘土採取→乾燥→粘土粉碎→篩がけ→捏ねるという1か月ほどの作業過程から陶土をつくり上げた。

#### 自己評価の集計・考察

この「淀川の土と炎が生み出す形」をテーマにしてのキャンドルカバー制作の活動に満足した生徒は84%いた。完成までに時間がかかったので緊張感を保つことはできなかったが、展示された作品を見た生徒たちの感動は、強く伝わってきた。生徒たちの感想



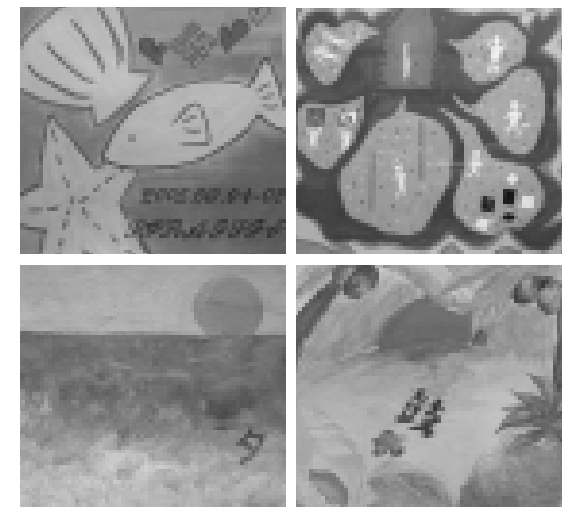
「警告の灯」

- ・堤防の土でキャンドルカバーができたので、びっくりした。つくるのは大変だったけど楽しかった。
- ・文化祭の展示で電気がついているのを見て、一つひとつ違って「おもしろいな」と思った。

## 4. 修学旅行の思い出アルバム

### (技術・家庭科と連携して)

一つの学習から新たな疑問や課題に直面する。そして、学習を深めていくという繰り返しをして修学旅行にたどり着いた。環境学習・漁業体験・海洋体験を組み込み、学習的な要素も盛り込みながら、生徒たちとのんびり過ごす旅行の計画をした。この旅で撮影したデジカメの写真アルバムを技術・家庭科と共同で制作した。世界に一つだけのものである。(たに よしずみ)



完成作品の一例



# 「行き着く果ては人糞発電所」

カボチャドキヤ国立美術館館長 トーナス・カボチャラダムス

ものを食べれば、糞が出る。

糞が出るから、ものが食べられる。

それが、自然の理というものである。

吾輩は、最前から気になって仕方がなかったの  
であるが、故種村季弘先生の食べっぷりが、尋常  
でないのである。

ビビンパプ、カルピタンのあと、ムルネンミュ  
ン、プルカルピ、ユッケジャン、プルコギ、オボ  
クチェンバン、ピンドトク、ウム、トッポッキ。

その場にあるメニューを全部平らげたのである。

「うまいにゃあ。地獄じゃ毎日、温泉卵で、飽き  
飽きしてたところだよ。」

「先生、そんなに召し上がって大丈夫ですか？」

「金にやら、心配しにゃさんな。」

「先生のお腹のことですよ。」

「食べすぎだの、腹痛だの、下痢だのと、そうい  
う下品な現象は、君たち物質界の人間に起きること  
で、僕ら精神界の人間には、無縁にゃことな  
よです。肉体がないによだから、腹がいたくなる  
わけがにゃいじゃにゃいか！」

「じゃ、なぜ食べるのですか？」

「君たち物質界の人間は、肉体を養うために食  
べる。ついでに美味しさを楽しむわけだ。僕ら精神  
界の人間は、栄養を摂る必要がにゃいから、美味

しさを楽しむためだけ食べるによだよ。」

「へえ、そういうものなんですか。しかし、先程  
から先生が召し上がった大量の物質は、いったい  
どこへ消えちゃったんですか？」

「お腹のなかにあるのさ。僕らは、3次元の空  
間に存在しているわけじゃにゃいから、いくらで  
もはいるによさ。」

そう言われて、種村先生は、吾輩の面前で脱糞  
されたのである。

その瞬間、吾輩の面前には、先生が召し上  
がった料理の皿が、まったく手つかずのまま、ずら  
りと並んだのである。

「仏様にあげたご飯と同じことだ。もったいに  
ゃいから、君、食べなさい。」

肉体を持たない精神界は、物質もエネルギーも  
消費しない、究極のエコロジー社会であるらしい  
のである。吾輩の住む物質界においては、そうい  
うわけにはいかないのである。

燃える生命の炎は美しいが、あげくの果てに燃  
えかすが残るのである。

糞尿の始末は、文化のパロメータである。

かつて、糞尿は大地に還され、還された糞尿は、  
新しい生命を育んだのである。

今では、糞尿は不潔な厄介物として、下  
水に流され、処理場に送られるのである。

カボチャドキヤ民主々義人民共和国では、  
糞尿は大切な資源として、電力に生まれか  
わるのである。明日は、種村先生を、「民主  
々義人糞発電所」に、ご案内しよう。

ところで、最前から吾輩は、気になって  
仕方がなかったのであるが、キラキラ裸電球  
の下で踊っている、2人の天使に見覚えが  
あるのである。

「あっ、エミちゃん！さとちゃん！」

(つづく)



「人糞発電所」

# 佐賀造形教育学習会サークル活動

佐賀大学文化教育学部附属小学校 西岡 速人

毎月第2土曜日の14時30分より17時まで(学期  
末は第1土曜日に開催することもあります)、造形  
教育のサークル活動を行っています。幼・保、小学  
校の先生を中心に参加していただいています。

楽しく授業づくりについて話し合ったり、授業  
に生かせる教材開発を行ったりしています。実技  
体験では、講師の先生をお迎えし、すぐに実践に  
使える内容から、私たち自身が趣味として楽しめ  
る内容まで、幅広く学習しています。

昭和58年9月に結成され、本年9月で265回を迎  
えました。顧問の辻宏達先生をはじめ、いろい  
ろな先生方に支えられて会が運営されています。こ  
れからも参加者とともに内容を検討し、サークル  
活動を盛り上げていきたいと思っています。

### 学習会での活動内容

#### ・実技研修

教壇に立って指導された内容を参加者に紹介し、  
児童への支援の在り方について考えます。保育  
や授業の参考にしています。



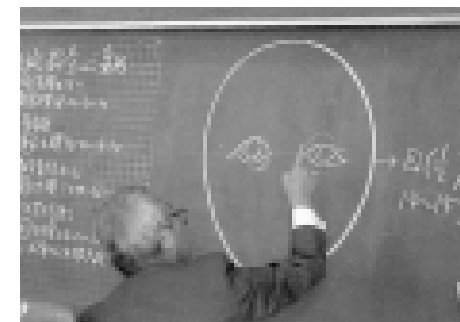
実技研修の様子

#### ・講話

私たちの技術習得のための研修も講師の先生と  
楽しく学んでいます。

#### ・実践交流、作品研究会

実際の授業実践をVTRなどで紹介したり、授  
業でつくった児童の作品を見たりしながら授業  
方法について学習しています。



講話の様子。美術の技法について学んでいます。



実践内容をVTRにて紹介

### 8月の学習会「夏季ゼミ」

夏休み中の8月の学習会は「夏季ゼミナール」  
として、幼・保、小学校の授業公開、実践発表、  
実技研修とそれぞれ1～2日間の日程で開催して  
きました。昨年と本年は大阪の福岡知子先生をお  
招きし、多くの先生方にご参加いただきました。

毎回の作品の制作や実践のお話から、「私もや  
てみたい」というエネルギーをもらっています。

これからもたくさんのご参加をお待ちしてい  
ます。遠慮なく事務局までご連絡ください。

(にしおか はやと)

参加費：月会費500円または年会費4000円

会 場：佐賀大学文化教育学部附属小学校

図工室

お問い合わせ先：

佐賀大学文化教育学部附属小学校 内

TEL：0952(26)1005 教諭 西岡 速人